

中の風化部で 硫酸塩鉱 白鉛鉱 緑鉛鉱などの酸化鉱よりなる塊状鉱床が発見され 約3,000 トンの鉱石を産出したと伝えられている。

金 鉱

1870年 ウージョア(Ouegoa)地方でプチット(Petite) 鉱床が発見されている。これも 露天化残留型の鉱床で 低品位硫化鉱床中に含まれる数 g/t の金が 風化作用による富鉱化機構により採掘可能となったものと思われる。

金の含有がみられるおもなものにはポヤ (Poya) 付近の火成岩中の含銅硫化石英脈 (品位 Au 3~4g/t) Thio 付近あるいは 北部の変成岩体 かんらん岩中の石英脈のほか ポエボーガラリーノ (Pouebo-Galarino) オウデアオー (Haut-Diahot) カナラ (Canala) などにみられる砂金鉱床が 記録にのこっている。

その他の有用鉱物

燐鉱石 石膏 石炭などは一部探鉱が行なわれた程度にとどまり 水銀 アンチモニー タングステン モリブデン 重晶石も 鉱物の産出記載があるのみである。

最後に ニューカレドニアの鉱物資源についてはその

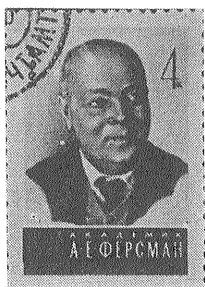
第2表 1975年以後のニューカレドニア生産予想

会 社 (プロジェクト名)	1970年	1973年	1975年	1975年以後
◎ル・ニッケル社 (工場拡張)	40	40	40	40
◎ネオカレドニアニッケル社 (ル・ニッケル社 カイザー社 (ネボイ工場建設)	5	40	45	45
◎カレドニア金属社 ル・ニッケル社 パチノ社他(ボエム工場新設)	—	10	40	40
◎コヒンパック社 インコ社他	—	—	30	45
◎ペナマックス社	—	—	5	50
計	45	90	160	220
輸出鉱石 (含有ニッケル80%)	65	70	70	70
総 合 計	110	160	230	290

(ニッケル含有量 ×1,000トン)

開発は 一部にクローム鉱床の開発などがあったにしても ニッケルに初まり ニッケルに終わるといっても過言ではなく INCO とともにフランスの国策会社であるル・ニッケル社の独占性が いちじるしく この中に最近になって 外国資本 技術の導入が徐々ではあるが 滲透しているのが現状で わが国としても 今後の資源対策上 買鉱一辺倒から脱脚し 長期ビジョン を考える時点にきているものと思われる。 (筆者は 鉱床部)

地 学 と 切 手



地球化学者フェルスマン記念切手

P. Q.

1966年3月30日に発行されたソ連科学者シリーズのうちの1種である。

フェルスマン(Александр Евгеньевич Ферсман)はすぐれた鉱物学者 地球化学者であるばかりでなく 鉱物資源の探査者 地質学の普及家としても知られている。彼は軍人の子として1883年11月8日 ペテルブルグで生まれたが 幼時はほとんどクリミヤ半島で過ごした。ここで彼の岩石学に対する愛情がはぐくまれた。1907年にモスクワ大学卒業。大学では鉱物学の講義をききヴェルナドスキーの指導を受けた。この間に結晶学

化学 鉱物学についての論文を5つ発表し 鉱物学会から金メダルを得た。卒業後2年間外国留学し ラクロワ ゴールドシュミットなどに師事し 帰国してモスクワ大学の教授になったのは27歳の時だった。しかし翌年にツァーの反動政策に反対して大学を追われている。

10月革命後彼は新政府に協力し科学アカデミーで研究をしながら ウラル~アルタイ地方 コラ半島の地質鉱床調査の指揮をとった。著書としては ペグマタイト (1931) 地球化学 (1933~39) コラ半島の有用鉱物 (1940) 有用鉱床の地化学的・鉱物学的探査法(1940) などがある。彼は1945年5月20日死んだ。

フェルスマンは地球化学を体系化する基礎的仕事をするとともに それを土台にして鉱床を開発することに重要な役割りを果たした。しかしそればかりでなく地質学の普及家としての彼の活動はとくにすぐれている。1928年にはすでに「おもしろい鉱物学」が出版され 多くの外国語に訳されている。「石の思い出」(1940年) 死後に出版「おもしろい地球化学」なども日本で知られている。